

永遠に響け、鎮魂と平和の鐘

沖縄県立開邦中学校 一年 安仁屋 紫 月

南風町の緑豊かな高台の森のふもとにその鐘はある。ひもをぐつと引けば、「カーン」と力強い音が響き渡る。その鐘は、今もなお森の地下深くに眠る方々に届いているのだろうか。鐘の音の余韻を感じながら、私はそつと手を合わせ目を閉じた。平和の大切さをかみしめながら。

ここは、南風原文化センターの側にある黄金森である。一九四五年三月下旬、米軍の艦砲射撃が始まったため、沖縄陸軍病院はここ黄金森の三〇数本の壕へと移動した。軍医、看護婦、衛生兵に加えて、ひめゆり学徒隊が動員された。当時のひめゆり学徒隊の人の話によると、壕の中は、血や膿、小便や大便、さらに汗臭い垢だらけの体の臭いなど、さまざまな臭気がまぎって壕内に漂っていたそうだ。センター内に再現されたベットに、私も横になってみた。すると、その当時の臭気や病傷兵たちのうめき声が聞こえてくるようで恐ろしくなった。ここで多くの病傷兵の看護や世話をしていたのだと思うと、ひめゆり学徒隊の苦しさが私の胸にもわき上がってきた。なぜ、彼女達は逃げ出さなかったのだろうか。

当時の教えでは戦場に行けるのは名誉なことだとされていたそうだ。しかし、親元を離れて従軍することが、十代の女の子にとってうれしいことであるはずがない。ひめゆり学徒隊には、飯あげという仕事があった。飯あげというのは、二人で樽をかつぎ、弾が飛び交う中を炊事場まで走り、ご飯を樽の中に入れた二人でかつぎ壕にもどってやることである。私は、当時の飯あげの道を実際に登ってみると、何匹もの毛虫やクモの巣を見つけて思わず悲鳴をあげてしまった。この道を彼女達は、死にもの狂いで往復したのである。

そうして運んできたご飯はおにぎりにする。初めはテニスボールほどの大きさだったが、だんだんと小さくなりしまいにはピンポン玉の大きさになった。食事も満足に食べられず、命の危険もある中でひめゆり学徒隊は死力をつくした。きつと一人一人に強い責任感があったからだと思は思う。本当は家族と離れてさみしい気持ちがあったはずだ。家族や友達が無事かどうか心配だったはずだ。しかし、もし今日自分達が逃

げてしまったら、重傷の兵隊達を見捨てることになってしまう。ケガをした人を助けたいという優しさが彼女達を壕にとどめていたのだと思う。

私は、陸軍病院の第二外科であった二〇号壕に入った。真っ暗でじっとして息苦しさを感じた。奥に進むと十字路があり、そこは当時の手術場であった。麻酔もされないまま手足を切断するだけの手術が行われていたと知り、私は思わず身震いした。強い恐怖心で体が縮こまり、そばにいる母にしがみついた。ひめゆり学徒隊は、どんな思いで暴れる病傷兵をおさえつけたのだろうか。十字路を左へ行くと十九号壕へ、右へ行くと二十一号壕へつながるが、どちらもくずれていて、今は行くことが出来ない。その二十一号壕へ続く道沿いにひめゆり学徒達の休息所があった。そこは、岩がゴツゴツしていて天井が低く、休めそうな場所ではなかった。とても人が暮らせる環境ではないのに、この陸軍病院が二か月半も使用されていたと知り、私だったら普通の精神状態ではいられないと思った。家族の元に帰ることができないまま、ここで命を落とした方々のことを思うと、悔しさと涙が込み上げてくる。「帰りたい。帰りたい。」と叫び訴える声が聞こえてくる気がした。

黄金森を訪れるまで、私は戦争の話を聞いても人事だとは思っていなかった。しかし、この真つ暗な壕の中で、ひめゆり学徒隊や病傷兵達の存在を感じ取り、沖縄戦が現実だったということを知った。曾祖母が「戦争は悲惨だ。二度と起こしてはならない。戦争は人を人ではなくしてしまふ。」と言う事の本当の意味が分かった。曾祖母は、沖縄戦を生き抜き私へと命をつないでくれた。あの凄まじい、地獄のような砲弾の嵐の中を生き延びた人々がいるからこそ、今の私達がいることを忘れてはいけない。そして、戦争体験者の生の声を聞けるのは私達の世代で最後かもしれないのだ。次の世代へ戦争の悲惨さや、平和の大切さを伝えていくのは、私達の使命である。伝えるためには、沖縄戦を学び、当たり前前の生活が当たり前でないことを、私達は知らなければならぬ。

沖縄には、まだ米軍基地がある。そして、世界では地域紛争が起きている。本当の平和とは何かを考え、求め続けていかなければならない。国同士の争いに巻き込まれるのは、罪のない住民達なのだとしり、戦争反対を訴えなければならぬ。今もなお、沖縄の上空を飛び交う軍用機の轟音に慣れてはいけない。多くの命が犠牲となった沖縄に、米軍基地があり続ける以上、黄金森の地下で悲しみや苦しみを叫ぶ魂達を鎮め癒すことはできない。

私は、これからも何度でも、この森へ行こうと思う。沖縄戦を知り、森に留められている魂の存在を忘れないために。そして、鎮魂と平和の鐘を鳴らす。もう二度と、この島が悲しみで埋めつくされることがないように。平和への祈りを込めて。